



小さな幸せ探し

北海道女性農業者倶楽部(マンマのネットワーク)

事務局長 片山 寿美子

◆ はじめに

「六十歳を過ぎたら広げた風呂敷を少しずつたたむ準備をするものだ」という亭主の小言をきき流し、走り回っているうちに、いつの間にか師走に突入し、アレヨアレヨという間に師走も半ば近くになり、クリスマスソングが、巷に流れ、デパ地下では、おせちの売り出しが活気をおび、慌ただしさが加速され落ち着かぬ日々になりました。

今年は、年明早々、霧島市の新燃岳の噴火に続き、東日本大震災、その後の台風被害と自然災害が立てつづけに発生し、信じられないほど衝撃的な光景をテレビ画面で次々と目の当たりにし、自然が起

こす災害の無残で凄しい爪跡あとに唯々声もなく驚愕するのみでした。

自然災害に相まって起きた福島原発事故は、原子力発電エネルギーに頼り切って暮らしてきた私たちの生き方、暮らし方のありようまで考えさせられる出来事で、その被害は今もじわじわと広がり不安の種をまき散らしています。当然のように、何の疑念も抱かず頼り切って、暮らしてきた私たちの小さな幸せを築く暮らしは、どこで道を間違ったのか、果てしない希望を満たすために経済成長優先の欲望に代わり、幸せを感じる感覚がすごく、鈍くなったのかもしれないとわが身を振り返り反省させられています。

片山 寿美子(かたやま すみこ)氏

昭和39年4月、北海道に入庁

生活改良普及員として農家の生活指導に従事。その後、北海道総括専門技術員として生活経営の専門家として生活改善全般および農林女性の自立に向けた企業化活動の強化等の生活改善分野で活躍。

定年退職後、北海道農業担い手育成センター(現(財)北海道農業開発公社担い手支援部)の就農コーディネーターを歴任。

現在、ボランティア活動の一環として、北の恵み愛食フェア実行連絡会事務局次長、北海道マリッジカウンセリングセンター相談役、全国女性・生活支援協会交流サポーター等に就任。

平成20年に北海道知事から「北海道らしい食づくり 伝承名人」の認定を受け、多方面で積極的な活動を展開している。



だから、今一度自分の暮らしを見直し、自分の力を高めて、幸せを感じるチャンネルをひろげてゆく道を探さねばと思ったりしていますが、何が幸せか、自分で広げすぎた風呂敷はなかなかたためないし、こんな時は、いろんな人の話を聴くに限ると決め、いろんな機会を通じてそれらしい話に聞き耳を立て幸せ探しのチャンネルを広げるヒントを探すことにしました、

◆ 幸せのチャンネル探し

その一

道東の小さなスナックで拾った話

冬のなりかけの頃、地域のコミュニティ活動によって農

地保全の成果が上がっているといわれる地域へ現地調査に出かけた際、夕食後の帰り道、あまりきれいとは思えないスナックの明かりに誘われ、居合わせた先輩と、暖簾をくぐったものの中はほの暗く、何とも屋台っぽくて、その昔は美人だったと思える面影を残したママさんが一人店にいて、恐る恐る入った私たちを、そう歓待するでも、邪険にするでもなく「どうぞ」というぐらいに迎え入れてもらって。飲んでいいうち、ママさんの指に燦然と輝くいかにも玄人好みのダイヤカルビーの指輪に目にとめた先輩は、「ママを襲う人無ないと思うけど、その指輪を襲う人が現れたら困るね」などと、不思議な輝

きを醸し出している指輪への興味を不躰とも言えるほど率直に問いかけ、私はオヤオヤと聞き耳を立てていると、ママは「これかい」と言いつつ、指輪の由来をとつとつと語り始めた。ママ曰く、指輪は、ママの人生の歴史を集成する自分へのご褒美でありこれから生きる守り神でもあるという。

つまり、此処のママも、よくありがちな事情の持ち主で、御多分に漏れず結婚した亭主が酒乱で手が付けられず、子供の身を守るために、子供を連れて離婚した後、子供を育てて暮らしてゆくために、全く素人でスナックを始めたものの、別れた旦那の酒乱によるトラウマで酔っ払いが怖く

て、何度もカウンターの隅に隠れ、時を過ごしたが、子供との暮らしを守るために店をやめるわけにはゆかず、必死で頑張つて、子供たちを何とかを育て、自立させ、今は心優しき子供や孫たちにも囲まれ幸せだと思える暮らしができています。苦労はしたけど子供たちを守りきることができて良かったと思っていると語り、ゆえに、ここまで頑張つた自分へのご褒美として贅沢とも思える指輪を自分で買い、これからの自分へ景気付けとして身に着けているのだと話してくれたが、修羅場の多かつた一人の女性の生き方に、さもありませんかという思いを強め、老境に入り、子どもたちや孫と幸せに暮らす場を、こ

の人なりに頑張つて築いてきたのだという強さに感動し、ささやかな幸せを守るために積み上げてきた勇気や、努力が幸せのあかしとしてママさんの指輪として輝いているのだと納得し、あとは調子の合わないカラオケでのどをからし帰途に就いた。

その二

マンマの仲間たちの 会話からひろった話

先日久しぶりにマンマの仲間たちが集つて経営塾なる学習会を行った際、いつも元気で、しつかり者のあるマンマが、浮かない顔して、御主人の体調が思わしくないのだと仲間に告げていたのだが、そ

れを聞く仲間の反応は様々で、「大変だよ、あんなの言うこと聞かないで無茶しているから自業自得みたいなものだよ」突き放すように言うもの、「なんとしてでも入院させて早く治させなさい、今死なせたつて何の得にもならないからサ、早く手当すれば治るはずだから、健康にしてさ、仕事させなさいやダメだよ」というものがあるかと思えば「そうだよ稼がせなさいや：あんな一人で何でもかんでも背負いきらないんだよ、農業者年金だつて旦那が持つていちゃうのだし、それだけだつて勿体ないしよ・・・」等々、それぞれ思いを込めて賑やかに煽りたてたりしますが、マンマ達の多くは、それぞれ

小さな幸せを求めて立ち上がり、今ようやくそれを手にし始めたばかりなので、簡単に手放したくないという微妙な算盤勘定がチラつくものの、

それに固執しているわけでもなく、亭主や子供たちの健康を願い、わが事業のダメージ

を最小限にするための知恵を出し合うかのように檄を飛ばしあっているのです。私の周りのビクマンマ達は、何のかんのといつても亭主や子供の幸せを願って、暮らしつくりを実践しているのだとの思いを強くさせられました。ちなみに檄を飛ばされていた当のマンマは「日頃、腹の立つことばっかりの人だけど、具合が悪いつていうから専門の病院を調べてちゃんと病院へ

連れてゆき検査受けさせたのだから……、私って偉いしょ……」

一同「ウン……」

その三

汗代の計算から

現職の頃、農業に従事する母さんの労働報酬確保が課題となり、母さんの労働報酬をどのように具体化させるといいのか検討したことがありました。家のために、働いてもその価値は認められず、ただ働きが当たり前とされ、誰もその矛盾に気づかず農業経営の中では母さんの実質的な労働評価は無に等しかったため、手にするか、しないかは別として、母さんたちが我が家の

経営で流す汗代を計算させることにしました。

農業労働分については、パートさんの時給に年間の総労働時間を掛けて、あらわすことができたものの、農家の母さんの場合、農業労働だけでなく家事労働もあるので家事労働をどのように評価するかということが課題になり、専門家の意見など聞きまわっていたところ、家事労働を経済的に評価するということに抵抗が多くて、一笑に付されるばかりでした。

中でも、家事労働は商品になりえず、貨幣価値として認めにくいものである。さらに家事労働は崇高なる家族愛に基づく献身的な労働であり、これを金銭で評価するのはい

かがかと思われますとご指導いただきました。

この結果を母さんたちと話し合ってみると、異口同音「私たちはそんな崇高な家族愛や献身的労働などという、まやかしにごまかされたくない。」

家庭の中では夫婦が平等に責任を持ち認め合って暮らしてゆくものであり、私らだけに犠牲を強いるがごとき考え方は許されない。

此処の家での私の汗代を自分で計算すると言って動き出した母さんたちは、炊事。洗濯、掃除にかかる基本的な家事作業時間を家事労働分として弾きだし、年間の総労働時間にパート賃金（自給）を掛けて算出し、農業労働分と足

して汗代の総額を数値でとらえなおした結果、「私はこの家で養われていると思わされてきたけど、私も家経費分くらい稼いだしていたのだね・

・・・」と、自分の労働価値が分かった母さんたちは、幸せの価値観を見直し、「私らが認め合って暮らして行ければ十分サ」とあれほどただ働きでいやだと口説いていた労働報酬確保を口にしなくなりました。

◆ まとめ

取り留めもなく、女性にとつての幸せ感をつづつて見ましたが、共通して見えることは家族が健康で仲睦まじく暮らし続けられることが究極の幸せ感になるのだということ

とが分かります。

そのために、それぞれがいろんな形で努力しているのだといえそうです。

おりしも、静岡県の御殿場地域で起業活動を率いているお母さんから、母さんたちが一つずつ作り上げたおふくろの味を詰め合わせた故郷便が届きました。

中には、うんみやあ味噌、ゆず味噌、ワサビ茎の三杯酢、冬菜の茶漬け、かきもち、お茶、梅干し、手作りこんにやく玉、しょうがの佃煮、柚子ポン菓子、はちみつげんこつ飴、オータムポエムなど、御殿場周辺の母さんたちの愛が一杯感じられ何とも幸せな気分になれる贈り物でした。

